

桜蔭俳話会 十二月句会(第二八二回) 於桜蔭会館

平成二十二年十二月二十日

- 3点 ひだり手は疑ひぶかし河豚の鍋 貞勝
- 2点① 霜柱未来持ち上ぐ赤子の手 守  
いつからが死か寒暄の機械音 守  
卓・平山郁夫画伯  
寒波来るシルクロードの果ての街 与史
- 2点 一茶忌や世の底辺も支へたし 眞三
- 1点① 目に沁みて焚火廻りし幼き日 幸枝  
冬蝶やぬくもり残る哺乳瓶 守
- 1点 婆と子の隠れん坊や冬木立 秀一  
冬茜富士を軒端に見しことも 与史  
有馬温泉  
金泉の坊の湯ほてり冬銀河 貞勝  
賀状描く虎の尻尾の曲りぐせ 与史  
杉玉に見る囃秩父山車 貞勝  
ビルの街残り一面冬芒 眞三  
歯音たつ白き蕪や煮るに惜し 幸枝  
山眠る森繁久弥眠りけり 貞勝  
ためらはず地図付録付き日記買ふ 与史  
重ね着をして又脱いで冬日和 溪水  
柄合はせ犬と飼主着ぶくれり 秀一  
大空は隅まで晴れし枯木立 ヤエ子
- ※ 三辻に立ち往生の子の狸 幸  
喪服より昏き色なし冬夕焼 守  
掃き寄せし落葉の山よ燃ゆるごみ 溪水  
落葉踏む音静かなり朽ち道標 ヤエ子  
枯芝や汀女住みたる句碑もあり 眞三  
枯木立蒼天突くも目に痛し 幸枝  
掃き残る落葉きらめき暮れにけり 秀一  
決心し友は春待つ修道院 幸  
山岳道くねつて芒光りをり ヤエ子  
片付けを又持ち越すか十二月 溪水

- 太陽光そこそこパネル待つ冬日 眞三  
冬菊や点滴つなぐペンの先 幸枝  
千両の実の色つきや舟地藏 幸  
さして無き予定消し込む師走かな 秀一  
塔の影ゆるる池面に鴨の群 与史  
凍て空を破りて離陸の米軍機 溪水  
着ぶくれて爪紅色にマニキニアす ヤエ子  
テレビで見新聞で見る冬予報 眞三  
寒風や「炭焼き」といふ字はかすれ ヤエ子  
低き日に向かひ急ぐや十二月 秀一  
鉄の門清められ義士祭り 幸  
極月や追はれ心の募りくる 幸枝  
眼帯のわななき歩き落葉鳴る 貞勝  
永平寺  
合掌の姿美し朝紅葉 幸  
凧や生き残りたるもの起立 守  
重ね着に仰ぐ夜更けの流星雨 溪水

不在投句 (瀬戸溪水、野上貞勝、岩崎眞三、  
桜井幸枝)